

# 母たちの愛と軌跡

その②

上原まり

筑前琵琶奏者

撮影／田口信治

東洋美術品の収集に特色のあるアメリカ、

ボストン美術館。今年は、その東洋館創立百周年にあたります。それを記念して開催された王朝美術展。十月十五日のオープニングの日、日本からただ一人招かれ、柴田旭艶さんは、ボストン美術館で

『平家物語』を奏しました。

旭艶さんは、上原まりさんのこと。

宝塚の娘役トップスターとして活躍した、

あの『ベルサイユのばら』の華やかな舞台を記憶している方も多いでしょう。宝塚から琵琶奏者へ。

旭会総師範の家に生まれ、六歳の頃から琵琶の修業を積んできた上原さんの師匠はお母さん。その人の

師もまた父であり、母でした。古典に新しい血を注ぎ、琵琶の世界を大きく広げた上原さん。「平均律では

表現できない微妙な音の味わいが東洋音楽の魅力」と語るその人は、母に導かれた幽幻なる

音の響きを、世界へ奏でようとしています。



母

## 柴田旭堂

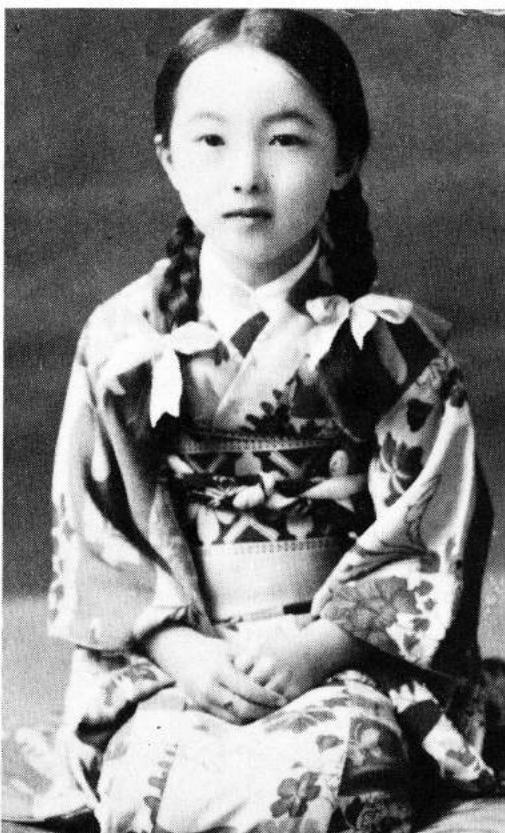


本名柴田吉子。大正七年神戸市生まれ。両親ともに筑前琵琶の師範という環境のもとで、幼少時から琵琶の後継者としてさまざま英才教育を受ける一方、神戸市内でも屈指の高級住宅地に大邸宅を構えた裕福な家庭で、一人娘として最大限の寵愛を受け育つ。両親によつて早くから、養子であつた兄を許婚と決められ、神戸市立第一高等女学校卒業と同時に十八歳で結婚。まもなく女児をもうけるが、一歳に満たないうちに病氣で失う。その後夫は出征し、戦死。父親も脳溢血で半身不随になり、まもなく死亡。戦中、戦後の荒波の中で鍼灸の免許を取得し、家計を支える。その後、市内の建築家と恋愛結婚。しかし事情あつて、

長女洋子（上原まり）を身籠もつてまもなく協議離婚。以降、娘を女手ひとつで育てながら、伝統芸能の復興に全力を傾注し、昭和二十三年に二代目として父親の雅号であった旭堂を襲名。筑前琵琶・旭会総師範として多くの弟子を育てるとともに、テレビ、ラジオをはじめ国内外各地で演奏会を精力的に行ない、それまでなかつた五線譜による教則本を完成させるなど、筑前琵琶の普及につとめる。

現在は、宝塚のトップスターを経て琵琶奏者となり、東京で活躍する娘と離れ、一人で神戸に暮らす。文化親善使節として海外での演奏会をこなすなど精力的な活動を続けている。レコードに『筑前琵琶旭堂の世界』。琵琶楽協会理事。芸團協筑前琵琶連合会理事。兵庫県文化賞、日本芸能実演家団体協議会文化賞、神戸新聞平和賞など受賞多数。長年の功績が評価され、この十一月三日、文化の日に勲五等瑞宝章受章が発表された。

琵琶の總師範であり、また柔道家でもあつた父、旭堂と吉子さん。文武両道に通じ、開達な性格だった旭堂は、町の人々の信望も厚かつた。



神戸のお屋敷町にある大きな家で、たくさんのお弟子さんで囲まれて暮らした幸せな少女時代。しかし琵琶だけは、本気の厳しい稽古が続いた。

# 母、父、師匠。どれも完璧だつた母に、一つだけ見ることのなかつた「女の顔」：

学校から帰ると夕飯まで琵琶の稽古。それは六歳の六月六日から始まりました。「……四顧暗澹しこあんたん」が、私には「しこワンタン」に聞こえる幼い頃から。うまく弾けないところがあると、はい、お稽古しなさいと言ひ置いて母は二階へ行ってしまいます。三十分か一時間すると戻ってきて、はい、どうぞと弾かせ、それでもできないと、また二階へ。それがずっと続きます。

自身も、長唄、常磐津と修業の場を広げ、勉強を怠らない人でした。稽古以外は娘をベタベタに可愛がり、時には、いない父親役までこなす。この母だけは泣かせてはいけないって、私はいつも思うのですが、一つだけ母に幸せが薄かつたとすれば、それは女として。私は七十を超えた母に、もう一度恋愛させてあげたい気分です。



昭和十年、神戸第一高等女学校卒業。  
級友と記念写真を撮る。前列右端が  
吉子さん。この後ほどなく、吉子さ  
んは親の決めた相手と結婚。

## 夫になつた兄

私の祖父、初代の旭堂は、とても変わ  
った経歴を持つていますのよ。

そもそもは福岡の庄屋の息子で、若い  
ときに柔道に興味をもち、かなり強かつ  
たようです。姿三四郎に憧れて講道館に  
入門しようとしたのが十八の頃。ところ  
が一人息子を東京へ出すわけにはいかな  
いと家族の猛反対に会つた。それなら仕  
方がないと家出し、東京へ向かつたので  
すが、家から出でていた搜索願いで、途中  
の神戸で捕まつてしまつたんですね。一  
度は家に帰つたものの、柔道家として生  
きる志は変わらず、今度は神戸へ向かう。  
神戸に居を構え、生田区(現・中央区)に  
ある警察と神戸二中の二ヵ所で柔道を教  
えながら暮らすことになるんです。

母の家は代々が琵琶奏者だったわけで  
はなく、祖父が始めたものなんです。歌  
舞音曲は女子供のやるもの、とされてい  
た時代ですから、柔道家などといふもの  
が手を出すべきものではないはずなんで  
すが、琵琶だけは精神修養によいとされ  
ていて、祖父も若い頃からやっていまし  
た。それに、祖父自身も琵琶が大好きだ



旭堂と旭栄。それぞれに琵琶の師範  
だった父母はよく議論をした。その  
父も亡く、二代目旭堂を襲名した娘  
吉子(右)の演奏会開催を喜ぶ母(左)。



昭和十一年卒業年六八

つたようです。いまの時代でいえば、若  
者がバンドをやるのと同じような感覚で  
はないでしょうか。筑前琵琶の家元に弟  
子入りして、福岡にいる間に雅号もいた  
だいて……。

そんなわけで祖父は、柔道を教える一  
方で、自宅で琵琶の師匠もしていたんで  
す。実は祖母のほうも旭栄という雅号を  
持つていて、やはり自宅で教えていまし  
たのよ。だから、同じ家に旭堂会と旭栄  
会という二つの会があつて、それぞれに  
弟子を抱えていた。まあ、母にとっては、  
琵琶の道を進むには頗つてもない環境だ  
ったわけです。

母は祖母の三十五歳のときの子供なん  
です。それ以前はなかなか子供ができるな  
かったものですから、祖母のほうの遠い  
親戚からもらい子をしましてね。男の子  
を一人。その子を自分たちの子供として  
育てていたら、意外にも母が生まれたと  
いうわけです。よく「もらい子をしたら  
とたんに子供ができる」とて言いますけ  
れど、ほんとなんですね。

ですから、兄と妹一人きょうだい。でも  
も、どういう事情だったのか、母が生ま  
れたとき、お兄さんのほうの本当のご両  
親との間で約束が交せられたらしいんです。  
母に知らされたのは、女学校を卒業す  
る間際だったそうです。実のきょうだい  
二人を許婚にする、と。

母は、その後なんとか生活をしていく  
たのもこのときの言いつけを守つて免許  
を取つたからだ、とよく言います。特に  
戦争が激しくなつた頃から戦後しばらく  
経つてようやく社会が落ち着くまで、琵  
琶を習うなんて人はいませんでしたから、  
自宅の一部を診療所にして、長い間鍼灸  
だけを生計を立てていたんです。母の人  
生でいちばん苦しかつた時期だったと思  
います。ものすごい努力家の母だからこ  
そ乗り切ることができたんですね。

そりやそうですね。でも、時代が時代  
ですから、好きも嫌いもない。親の命令  
は絶対でしたから、恋愛とはどういうも  
のかも知らないうちに結婚してしまつた。  
だから、母が言うには、戦後私の父  
と再婚したときが人生ではじめての恋愛  
体験だつたと。でも、結局はそれもうま  
くいかなかつた。そこから母の苦労が始  
まります。

## 知らず知らずの師範修業

少女時代の母は、それはそれは恵まれた環境の中で、優雅な生活を送っていました。子守さんや女中さんがいて、琵琶や柔道のお弟子さんからも大切にされて。もちろん、祖父はじめから母を琵琶の跡継ぎに考えていましたから、毎日のお稽古だけは厳しかつたらしいですけれども。だいたいが歌舞音曲の好きな祖父でしたから、母を連れてしまつちゆう映画や歌舞伎を見に行っていたらしいんです。



特に大晦日なんかは、普通の家ではてんてこまいなんですが、母の家には女中さんや内弟子の方がたくさんいますから、祖父は母といっしょに神戸市内の映画館をハシゴしていたそうですよ。それに、こんなこと言うと叱られちゃうんですが、祖父が警察で教えていた関係で、どこも顔パスを入れる。のんびりした時代でした。

そういう娘時代の経験が自分の美意識とか琵琶を演奏するまでの微妙な表現にものすごく役立っているって母は言っています。祖父は歌舞伎や能にもしょっちゅう連れて行って、いいものをたくさん見



戦争で夫を亡くし、この後、再婚、離婚、出産と、人生の幸と不幸が一時に吉子さん(前列右より三人目)を襲う。出征兵士家族慰安の演奏会で。

せたんですね。

そんな自分の経験があるものですから、母も私が小さい頃から能や歌舞伎や美術など、一流のものを見せ、一流のものに触れさせてくれました。戦後しばらく生活が苦しかったときでも、そのためのお金には糸目を付けませんでした。おそらく、私は直接言いませんでしたが、まわりの人には「洋子(私の本名です)をいすれば三代目に」と言つていたようですから、師範として将来恥ずかしくないだけの素養を身につけさせたいという願いがこめられていましたんでしようね。

それに、自分が娘時代に父親からしてもらったことと同じことを私にしてやりたいと思つていたようです。というのも、私がお腹にいるうちに父と離婚して、私が父親を知らずに育つているのですから、そのことに対する負い目があつて、しかも自分は娘時代に非常に恵まれた環境張りと使命感が吉子さんを支え、精神的打撃も、経済的苦痛も乗り越えてきた。琵琶に向かう時が一番の幸せ。

好きなのが第一。そして持ち前の頑丈で育つたので、父親がいなくても同じ経験を娘にさせてやりたいと思ったんですね。私自身は、父親がいなくてもぜんぜん平気でした。物心ついてから別れるときこう傷痕が残つたりするんでしようが、何しろ生まれたときから父親というものを知らないわけですから、別にどうつてことはないんですよ。母が気づかうほど本人は感じていません。

でも、そうやって小さいときにいろんなものを見せてもらえたということは、私の大きな財産になっています。だから、母にとても感謝しているんですね。

特に感謝しているのは、母が劇場や美術館に連れて行つてくれるそのつど、この物語の歴史的な背景はこうだと、この画家はこういう考え方を持っているんだとか、ひとつひとつエピソードを交えてわかりやすく説明してくれたこと。

こんなことがありました。あれは私が小学校に上がる前だったか、長谷川一夫さんと淡島千景さんが共演された『残菊物語』という映画を見に行つたときのこと。その中に、淡島さんが長谷川さんの足袋を懐に入れて温めてから履かせてあげるシーンがあるんですね。雪の降る寒い日。私は子供だから、どうしてそんなことまでするのかわからない。すると母がポツツとこう言いましたよ。  
「おまえが大きくなつて、好きな人ができたときには、ああしてあげなさい」  
私が宝塚に入つて娘役をやることになつたときも、母は歌舞伎の女形の人の話をしてくれました。その人は舞台に出る前に楽屋で氷を使って手を冷やすんです。立ち役の人に手を握られる場面がある。立ち役の人が自分の手を握つたとき、「なんて冷たいんだろう。自分の温もりでこの手を温めてあげよう」と思うと、それが客席に伝わるつて言うの。そうしたら、立ち役の人があくまで大きく、温かい人間に見える。……宝塚の娘役も男役さんを立てなければいけないわけです。そういう相手に対する心がけを母は教えてくれたんですね。

宝塚入団は、た一度のまりさんの反乱。空前の大ヒットとなった『ベルサイユのばら』で、マリー・アントワネットを演じるまりさんの晴れ姿。

## お嫁に行くなら宝塚

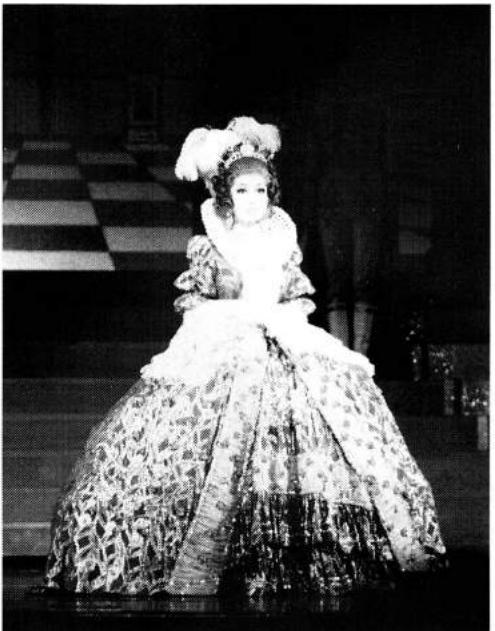
父のこと、私はほとんど知らないんです。どういう人で、どこで知り合ったのか、どうか、どういう仕事をしていたのか、どうして離婚してしまったのか……。母も言いたがらないし、私も聞くのが可愛いそうで何も言わないの。ただひとつだけ、恋愛結婚だったということだけは話してくれました。

終戦後まもない貧しい時代。実家に戻ってきた母は、私を産むとすぐ自宅に鍼灸の診療所を構えて働き始めました。それでも、祖母との三人家族が食べていくのがやっとという生活。お嬢さん育ちの母、女学校を出てすぐに結婚して世間を会の荒波に揉まれた時期でもありました。その頃、母の最大の心のよりどころが琵琶だつたんですね。

私が幼稚園に行く頃には世の中が落ち着いてきて、皆さんにも余裕が生まれてきただけでありますね。祖父や祖母のお弟子さんたちが「先生のお嬢さんが琵琶をやっているらしいと聞いて……」と習いにくるようになります。そうやって少し



この十月、米国ボストン美術館に招かれ、「平家物語」を演奏した上原さん。海外公演は昨年のニューヨークにつき二度目。琵琶の音が世界に響く。



宝塚入団は、た一度のまりさんの反乱。空前の大ヒットとなった『ベルサイユのばら』で、マリー・アントワネットを演じるまりさんの晴れ姿。

ずつお弟子さんも増えてきたため、診療所はやめて琵琶だけに専念するようになりました。

ところが、世の中が世の中ですから、琵琶なんて斜陽の代表選手みたいなものですよね。経済的にもずっと苦しくて、私が小学校二年生の頃でしたか、母がもう鍼灸もだめだらうから、証券会社の外交員になる」と言い出した。そのとき、何かのお弟子さんたちが相談してくださいって、「やっぱり先生が琵琶を捨てるとなると黙過できない。先生の弟子である以上、たとえお稽古を休んでも、毎月必ずお月謝を払うということにしようじゃないか。そうすれば、ある程度は先生の生活を保障してさしあげられる」というふうに申し合わせてくださった。そのおかげで母も立ち直って、なんとかがんばろうということになつたんです。

私が琵琶を習い始めたのは、六歳から。毎日小学校から帰ると、晚ごはんまで付っきりでお稽古。そりやあ厳しかったですよ、師匠としては。でも、いつたんお稽古が終わると、もうデレデレの甘い母親になりました。

やつぱり片親ということで、母の心中では私に対する負い目が非常に強かつたんだと思います。その分、ものすごく愛情が深かった。だから、学生時代なんか、ボイフレンドから電話がかかってくるといたへんでしたよ。声のトーンが一オクターブ下がりますから(笑)。あとで「きみのところのお母さんつてこわい

ね」ってよく言われました。そう言えば、何かあると「私は父親の分も兼ねていますから」というのが私にありますね。だから、どうしても度口癖でした。そんな母を泣かせるようなことをしてはいけない、というのが私のもあるんですね。だから、どうしても度外すようなことはできなかった。

でも、さすがに、琵琶の世界というのは封建的ですから、高校生の頃には跡を継ぐのがいやになりました。で、勝手に宝塚の試験を受けたんです。母は泣きましたよ、さすがに。

でも、母親の心境としては複雑だったんですよ。琵琶も継がせたいが、結婚もさせたい。母自身の不幸な体験がありま

すから、娘には幸せな結婚をさせてやりたいと。だから、「家事はしなくていい。自由に琵琶を続けなさい」と言つてくれる理解ある旦那さんが現われればいちばんいいね」。母はそう言つていました。だから、「宝塚に入つたら、いいところにお嫁に行けるよ」という私の一言が効きました(笑)。試験当日は「おまえはどうせ何もできないんだから」と琵琶を持つてきてくれました。あとで聞いたら、そのときの試験官の先生が「あの琵琶を弾く子、おもしろいやないか」とおっしゃつたそうです。

結局、宝塚で十五年間、洋楽をいろいろ勉強させていたいたおかげで日本の古典芸能のすばらしさを再認識し、こうして琵琶奏者の道を選ぶことになつたわけですから、あれもやっぱり母の導きだつたんでしょうね。